

閉会全体会

広がる協同と創造の実践

永戸 祐三 (日本労働者協同組合連合会)

昨日、こちらに来さしていただきまして、どんな集會になるかというふうに思いつつ一日終わろうとしているわけですが、わたし自身も、企業組合の連合会の大友さんが終わりの方に絶句されましたけれども、企業組合がどういうふうに発展していくのだろうかということでは、同じように自分自身の問題としても考えてきましたから、感慨を受けました。私自身は、北海道はコープアイランドだという話をきいて、考えてみれば本当にそうかなということをおもいつつ太田原先生の全体報告をきかせていただきました。こういうふうにして協同という事を基調にして、一堂に会して語り合うということが、何かしら物質的成果だとか成績、数字に現われてということではありませんが、全国の協同集會や、長野でずっと続いている集會を見ていますと、やはり参加者一人ひとりが新しい生き方や働き方、地域を考えるとということについて見方をきちっと変えていっているということがたぶんその地域や自分たちの働いているところで新しい時代を確実に切り開くということになっていっているのではないかと。私自身は第1分科会をずっときいていましたが、内容豊富で一日ではとても無理だなあという感じを受けました。そのことと、今日の内容はそれ自身として全国全道に伝えていただきたい、わたし自身も伝える役割をしなきゃいけないと思いました。

協同と創造の時代へ

わたしは、北大ともいろいろ縁がありまして、学生運動をやっているときに野次られながら講演をした覚えがあったり、あの当時の高度成長期で、一方では学生運動でもそうですし労働運動でもそ

研究所



うだったと思うのですが、とにかく経済を豊かにすること、アメリカに追い付くことでそれを推進する人と、それに反対する人達がいる、その時代の運動が概略していえば抵抗と反対の闘争ということに言い切れるだろうと思います。この数年、わたし自身、労働組合の運動に関わり、事業団、労働者協同組合というふうに駒を進める中で、今の時代というのはやはり、単純な抵抗と反対ということではすまない時代になっているのではないかと。それは新しい世の中を作ろう、やはり人間がどんな場合でも尊厳ある生き方のできる社会を作ろうではないかという立場に立ったときに、当然反対しなきゃならないことや抵抗しなければならぬこともあるけれども、やはり根本には、今の時代というのは協同と創造の時代ということがいえるのではないかと。その協同ということを一歩、問い直すとか自分自身突き詰めて考えてみるということの必要はますます今日、重要になってきたというふうに思います。

私は、北海道の場合でいえば、労働者協同組合へ企業組合がどう発展していかれるのだろうかという事をいろいろ考えながら参加したわけで

すが、全国でも、あらゆる地域で一つの地域づくりの主体として、また労働者が変わっていく主体として労働者協同組合を根付かせたい、という仕事をしているわけですが、今日のこの集会に参加しまして、「広がる協同と創造の実践、それと北海道での労働者協同組合運動の本格展開」ということになるのだろうと。「協同」という言葉というのは、協同組合の専門用語ではなくて、協同という大きな広がりの中で、様々な協同組合ができてきたという歴史じゃなかったんだか。それを思うと、いろんな協同の営みがやられていて、協同組合企業もある。従って、一人ひとりが、自分の問題地域をつくる時に、協同という見方でどう見るかということと、先行する協同組合自身も、もう一度協同ということの本当の意味とこの問い直しなければならない時代にきているのではないかという事を感じました。

地域づくりのコーディネーターに

第1分科会で、私は4つの報告を聞いたのですが、オホーツクネットワークの川崎さん、稚内市民ぐるみの子育ての平間先生、剣淵北の杜舎の横井先生、道央市民生協の美々川石鱈の木村さん、本当によく話されて、話がうまくて、そして内容があるという、もっともっと聞きたいと思いました。一番気付いたのは、この人達が自分の本業ということと地域・町づくりということが従来のように俺はここで食っているんだということをすっかり越えてといいますか、つまり自分たちのやっていることの実際の意味だとか本当の成果を挙げようと思ったときに、やっぱり自分が一人の市民、地域住民として地域に何をやるのかということと自分の仕事を考えて行動しているということがこの4人の人の共通項だったんだろうと。その意味ではこの方々は非常に優れた、高い水準の地域づくりのコーディネーターだなあと感じました。ということはそうなる和我々一人ひとりがそういう存在にならなきゃいけない。労働者協同組合をやるうといっていると、例えば私にすれば、労働者協同組合の事業高が上がって、組合員さえ増えれ

ばいいんだということでは、それが本当に協同という事を体現した組織だとすればそういう形だけでは伸びないと思いました。

協同の思想による新しいシステム

話は変わりますが、儲けるということで作られたこの社会が、フォードのシステムも、それを越えたといっているトヨタのシステムも、やっぱり破綻の局面にきたと思うんです。それは取りも直さず、今の経済システムである大量生産大量消費、大量投棄ということがすでに地域環境そのものの悪化という事を見ても分かるように、人間の意志っていうものをこういうシステムが吸収し得なくなってきている。それに対して、協同の思想と原理にとってどうつくりなおし発展させることができるのかということが今問われているのではないかと思います。例えば、今我々が始めている東京に東京民医連を支えるということで尿だとか血液だとかの検査チームを400ぐらいの医療所から集めてきている東京で8位ぐらいの優秀な病生理研究所というところがありますが、このところが、献体品を集めるのに、クロネコを使ったり赤帽を使ったりパートを使ったりアルバイトを雇ったりとありとあらゆる資本主義的な手法を使ってきた。結局だめだった。そこであなた方は労働者協同組合という理念で、労働者自身が主体になってといっているから、あなた方と一緒に最終的なものだからしっかりやって欲しいということでやり始めています。ここでふと思ったのは、病



体生理研究所が献体品を集めるのに、多いところでは1日3便、少ないところで1日1便、東京中を車が駆けずり回っているわけです。我々が知っているつばさ流通というところも運送業だから一日じゅう駆けずり回っている。東京民医連の中でも、医療材料を運ぶ処は車で走り回っている。薬品を協同購入して薬品が走り回っていてさらに薬品と直で取引している民医連の病院はまた薬品会社を車で走り回らせている。これは一つひとつの企業にとっては効率がどうで営業成績がどうで利益がどう上がるかという事を問うていろいろ価値観を決めるんでしょうけれども、こんなに一つひとつが別れてやっていることの社会的なロスだとか無駄にしていることがどれほどのことかという事を考えねばならない。今我々がつくり上げようとしているのは、感染性の医療廃棄物をそういう400院所から集めて処理するということと、献体品を集めるという事を統合させてやるということによって、社会的なロスがどれくらい圧縮できるのかということをして社会に打ち出したいと考えています。今日の第1分科会の発言の中にも、そうした観点からの様々な発言があったようにも思いましたし、我々がやろうとしていることは、あまり派手さを感じさせるものではないけれども、新しい産業革命とでもいうような内容を持ち始めてきているのではないかと思います。

新しい協同組合組織への援助

労働者協同組合が11番目の組織として昨年10月ICA大会で加盟を認められました。先行する協同組合との決定的な違いは、監督官庁もなく、法律もなく、そして非常に小規模な労働者協同組合というのを、大きな権威のあるICAという組織が全部調査をして、十分に協同組合である。加盟を歓迎するということになりました。このレイドロウ報告から今度のベーク報告への中で、一つ注目すべきことは、新しい協同組合が、今度の基調にもなっていると思うのですが、様々な分野で生まれたり、また自らが生み出す新しい協同組合ないしは協同組合的組織を排除するのではなく

て、成長させるために援助しなければならないとの項があったと思います。わたしは世の中の新しい経済システムの一つとして、協同組合が位置付くとすればそうした観点というのはこれからますます重要になってくるのではないかと思います。我々の仕事も今はまだ、サービス業がほとんどなんですけど今年から、今日も洗剤の美々川石鹸のことがいわれていましたけれども、この石鹸が一番生きるであろう従来の洗濯機ではない、ドラム型の洗濯機が労働者協同組合グループのタウ技研が開発して（現在は〈エコテック〉が引き継いでいる）、わわれが労働者協同組合グループとしてその生産をやる。それで神奈川の生協や東京の生協と一緒に提携をして売るということでかながわ生協が一番に乗り出しているのですが、5生協がこのドラム式洗濯機に期待して提携をしてやろうということにもなってきております。今の時代というのは、いろんな意見、とんでもないことだということもあったりするんですけども、農業では新農政が敷かれていき、ゴールドプランが立てられ、通産省の産業構造審議会が新しい企業システムについてすでに検討を始めている。こういう時期に、我々自身都市の労働者が農業をやるというのは、一つの夢でもあるけれども、農業をやる労働者協同組合というような、従来には考えられないようなものがこれからできていくのではないかなというような期待感をわたし自身持っているところです。こうした時代では、協同組合自身も変わっていくだろうし、変わっていくかきやいけない。しかし、根本のところ、人間が本当に豊かに成長するということと、地域を発展させるということが基本になればいけないし、それを貫く協同の理念というものを本当に高く掲げなければならないときにきているんだろうというふうに思いました。結局のところ、新しい生産—流通—消費のシステムをつくることと、協同組合がどういう役割を果たせるか、そのときの基礎になる考え方は、新しい地域づくり町づくりということと、人間の生活全般を、本当の意味で豊かにしていくということではないかと考えました。

地域の発展と人間の成長への貢献を

I C Aの東京大会では、全中の堀内さんは、「私は市場競争が全てを解決できる唯一の原理だとは考えていません。東京大会のもう一つのメインテーマである、地球環境の保全はもちろん、食糧の安定的な確保、女性の地位向上、高齢者福祉の恒常など、現代社会の様々な問題や不安の克服は21世紀に向けての人類共通の重要な課題です。このような問題は競争原理では解決が不可能で、協同組合が掲げる相互扶助の理念こそ、課題を解決する力を持っています」という歓迎のあいさつをしている。また、国連事務総長のガリさんのあいさつの中では、「協同組合は、生態学的に合理的でかつ持続可能な開発形態を確立する際の非常に効率的な要員となるものだ、生態学的に安全で持続可能な開発を促進するために、皆様方と包括的なパートナーシップを発展させる用意がある」

という事を国連の代表として言う。そして、「あと3年でI C Aは100周年を祝い、国連は50周年を祝います。1995年は、社会的開発に関する社会サミットが行われる年でもあります。それは21世紀の幕開けにおいて、人類が直面する社会的経済的環境的挑戦に統合的な対応を見出すすばらしい瞬間になるでしょう」という期待感を込められている。われわれも、企業組合が通年事業ということから始まって、新しく本格的に労働者協同組合に発展しようとする。様々な協同の営みが、真の地域の発展と人間の成長に貢献できる道はこうだという事を、こうした『協同』集会等の行動を持ちながら見出していけたら、ということ強く思わされた集会でありました。

これからはさらに一日を二日にしたり、充実することによってこの集会を持続していただきたい、という事をお願いして終わります。

参加者の感想

高橋栄治 十勝幕別企業組合

労働者協同組合とは何かという点について建設一般の大会文書などで大まかに捉えていたつもりでしたが、ノンエリートの労働者、雇われ者根性の一掃と今後の高齢者の生き方、新しい社会を考える機会を持たたことを大きな収穫としたい。

今後も継続的独習学習を通じて組織全体のものにしていく努力をすべきだと痛感しました。

○会場設営等に努力した参加団体の諸兄姉に大いなる敬意を表します。

佐久間吉也 センター事業団

北海道では初めての「協同」集会ということで大変有意義な集会だと思いました。分科会も活発な討論になり、勉強になりました。

○もっと時間が取れば、もっと良かったのではないかと思います。

西村一郎 勤生協総合研究所

北海道における各種協同組合の現状について理解を深めることができた。

1回目でこれだけの準備をされるのは大変だったと思いますが、2回目に向けて以下の改善が必要ではないでしょうか。

① テーマとの関係で、報告内容を絞る。

北海道における特殊性と一般性

② 労働者協同組合を中心の協同ではなく、各協同組合のバランスをとる。

○昼食時に交流できるコーナーがあると良かったのですが。

中尾雄児 民族歌舞団こぶし座

協同組合の理念と実際の間、大きな開きがあります。この溝をうめないと協同組合運動は継続できなくなるように感じます。